

宗教者災害支援連絡会 5 周年シンポジウム

「宗教者の実践とその協働」(2016 年 6 月 19 日) 開催報告

プログラム

日時 2016 年 6 月 19 日 (日) 14:00-17:40

会場 東京大学情報学環・福武ホール ラーニングシアター (東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学本郷キャンパス内)

趣旨説明

蓑輪顕量氏 (東京大学)

報告

1. 金田諦應氏 (通大寺住職) 「東日本大震災から熊本地震へ—傾聴移動喫茶「カフェ・デ・モンク」の歩み—」
2. 栗田暢之氏 (東日本大震災支援全国ネットワーク (JCN) 代表世話人、NPO 法人レスキューストックヤード代表理事) 「災害支援における市民活動と宗教者・宗教団体との連携に向けて」
3. 新倉典生氏 (東京都仏教連合会事務局長) 「東京都仏教連合会の防災備災の取り組み」

熊本地震報告

1. 西川勢二氏 (真如苑・SeRV)
2. 篠原祥哲氏 (世界宗教者平和会議 (WCRP) 日本委員会)
3. 稲場圭信氏 (大阪大学)
4. 黒崎浩行氏 (國學院大學)
5. 御手洗隆明氏 (真宗大谷派)

自由討議

司会 稲場圭信氏 (大阪大学)

コメンテーター 島菌進氏 (上智大学)

報告要旨・記録

金田諦應氏「東日本大震災から熊本地震へ—傾聴移動喫茶「カフェ・デ・モンク」の歩み—」

仙台こころの相談室共同代表。傾聴移動喫茶カフェデモンクマスターです。

本日は宮城栗原市県からやってきました。今朝ほど、お寺の墓地付近にクマが出没しているので注意するようにと警察から連絡ありました。今年は、近年になく「熊」を身近に感じています。

本日は、東日本大震災後の活動と、熊本震災での活動についてお話をしたいと思います。

志津川湾は私たち内陸の人間にとって、豊かな海の幸を育み、何世代にもわたって命を支えてくれた海です。また、お寺の裏には栗駒山がそびえ、そこから流れ出る水は、一迫川となり、やがて北上川と合流し、そして追波湾、石巻湾に注ぎます。同時に歴史・文化・風土・宗教も共有している地域で、川上に住む者は、川下で大変なことが起きれば助けるのは当然の事と想いながら活動をしております。

3月12日、津波が沢山の命を奪った後の、志津川湾に登る朝日の写真です。この湾に親、兄弟、友人、そして家族同様に可愛がっていたペットが沈みました。大川小学校の校庭には泥だらけになり、持ち主を失った沢山のランドセルが並んでおりました。

私達の活動地域の犠牲者は、約6000人。東日本大震災で犠牲になった約20,000人の方々の三分之一を占めます。生と死、喜怒哀楽が入り混じった状況でした。

最初の活動は火葬場でのボランティア。手製の棺桶にいれ、軽トラックに積んできた方。冷凍車の中に、ご遺体をのせてこられた方もおりました。

最初の火葬は小学生5年生の女の子二人。小さなお棺が二つ並びました。私達はお経が読めなくなり、新聞記者は写真を撮れなくなった。必死にそれぞれの使命に向き合う日々でした。

宗教者だからといって無条件には火葬場には入れません。市当局、運営している会社。そしてなによりも大切なのは実際に現場で働いている方々との合意が必要です。あらゆる役割の方々との協働作業は慎重さと繊細さが必要です。

49日の追悼行脚。仏教の僧侶と、キリスト教の牧師さんとの鎮魂の行脚。お経はやがて叫び声に変わり、牧師はどの讃美歌を歌ってよいか迷い出し始めました。海岸に立ち、今まで学んできた宗教的言語が全て崩れる感覚を味わいます。神と仏は何処にいるのだろうか？それでも私達僧侶と牧師は歩き出しました。

大きな出来事の前に広がる、複雑で多様な悲嘆。心が凍り付いて動かない。泣くことすら出来ない状況。私達の使命はただ一つです。動かなくなった心を動かし、共に未来への物語を紡ぐことです。

傾聴移動喫茶「カフェデモンク」の活動が始まりました。心ある方々からの寄附で運営。教団からは全く援助は受けておりません。

未来への物語が立ち上がる「場」。ホットできる「場」。安心して泣ける「場」を作る。その過程は「即興アート」と表現したいと思います。

ケーキ、スイーツ、香り高いコーヒー、美しくデコレーションされたお花、微笑むお地藏さん、お位牌などの心を動かすアイテムをさり気なく配置します。週一回の活動。人が来ない日もありましたが、そこにいることに意味があると自分たちに言い聞かせました。

他宗教の方々との協働。布教を目的とせず、悲しんでいる人に真摯に向き合う宗教者ならどのような宗教・宗派でも受け入れました。

様々な宗教・宗派の方が、一緒に炭火を囲む写真があります。火に手をかざし、被災地の苦悩を語り合う姿。火は「原子力の火」ではありません。人類を人類たらしめた「炭火」です。炭火の中には芋が入っています。孫を失い、遺体が見つからないと嘆く老婆に差し上げる「焼き芋」です。それを様々な宗教者が一緒に焼く。この火を離れてしまうと「黒い巨塔」の呪縛が待っているのです。だから絶対にこの火を離れては成らないと思う。やがてこの火の周りから臨床宗教師が誕生していきます。

それにしても東北の、寒い冬はこたえました。(火鉢を囲んでの写真)

魂の救済は、その土地の歴史や精神風土から生み出されたさまざまな文化の中にあると感じます。お地蔵様は、心の奥ひだに固まってしまった感情を蘇らせたのです。

南三陸町防災センターで夫を失った方は、メガネをかけたお地蔵様に向かって叫び泣きました。初めて人前で大きな声で泣いたのです。人知れず泣くのと、人前で泣くのは大きな違いがあります。彼女の悲しみの物語は、私達の物語と合流し、「私達の物語」として未来に向かって動き出したのです。

伝統の中で動き出した物語があります。

津波が来る20日前、その家族は喜びに満ちていました。娘が故郷でお産をし、初孫を授かったのです。しかし、津波によって妻、娘、初孫を失います。仮設住宅での孤独な生活。ゴルフ場に行っては弾道の定まらないボールを打ち続ける毎日。

初盆に灯籠を流しました。流した灯籠は、最初3個ばらばらに流れたけれども、最後は一つの灯りとなって海の彼方へ消えて行きました。「彼の世にいて三人一緒に暮らしている」老人はそう確信した。老人の物語は少し前に動き出したのです。

それでも時々心がぐらつく。老人は日本刀を買います。そして刃先を見つめ、よろめく心を引き締め直しています。灯籠流し、日本刀の持つ伝統的な力は、悲しみを背負いながら生き続けた日本人の、大切な財産であることを知りました。

再生する海。一年後、49日を行脚した同じ場所を牧師と共に歩きました。ヘドロと死臭の臭いが漂った49日行脚と違い、浜から磯の香りが漂ってきます。磯が萌え始めています。海が再生しているのを全身で感じ、「色即是空・空即是色」、諸法の実相の真理がストーンと落ちてきました。世界は破壊と再生の繰り返し。その中に喜怒哀楽の人の世がある。宗教者はその中を、共におろおろ歩く存在なのかも知れません。

瓦礫の中、避難所、仮設住宅集会所から、5年かけてやっと復興住宅に辿りつきました。仮設住宅でお会いした人々と、復興住宅での再会を喜び合いました。皺と白髪が増え、病気は死に病へと向かっている人が多いのに驚きました。災害公営住宅には「孤独と死」が待ち受けているように感じます。

仮設住宅には騒音や近所の諍いなど様々な問題がありました。しかし、それが本来の人間の住む場所ではないかと感じています。

最近では仮設住宅集約化（自治会の再編、人間関係の再構築）が本格的な日程になってきています。仮設自治会を5年間運営してきた会長が、これから予想される問題を、ため息混じりに呟きました。避難所から仮設住宅よりも、5年間住み慣れた仮設住宅から新しい仮設住宅に移る事は、最初から自治会を立ち上げるより難しいという事なのです。

Café de monk は、2年前に熊本に支店を開き、東北大学で臨床宗教師研修を修了した臨床宗教師が中心となって活動していました。熊本の震災では前震の夜から開店。現在では熊本、浮城市、益城町を中心に、週に2回ほど傾聴活動を展開しています。衣食住が安定してくると、次は心のケアが大切になってきます。心の復興には長い年月がかかると思います。

また Café de monk は全国7箇所、その土地の風土や、抱えている問題に寄り添いながら活動を展開中。今年はあと2店舗開店の予定です。

栗田暢之氏「災害支援における市民活動と宗教者・宗教団体との連携に向けて」

阪神淡路大震災では、大学事務局に勤めていた私は、のべ1500人の学生ボランティアに大学側の窓口として活動した2ヶ月間で大きな学びを得た。

被災地に関われば関わるほど課題が深刻化する。その課題の探求。

また東海地区の来るべき災害にむけて対策等さまざまな役割を自分に課し、

2000年東海豪雨を経て、大学を辞めNPO法人レスキューストックヤードを設立。

NPOの立場で21年災害ボランティア市民セクターとして携わった。

熊本地震。震度7の地震が2回はありえず、支援者が現場にすぐに行くことに課題。

全壊でも支給は80万のみ。これでは再建ができない。

ブルーシートをかけ、家の応急処置。ボランティアセンターに頼んでも危険な作業。

業者、瓦をなおすのに五年待ち。

これから梅雨・台風の季節が本格化。だが行政ほとんど対策とれていない。

避難所においても、障害者・高齢者など要援護者にも対応しきれない現状。

自分たちに何ができるか？をもう少し皆で考えなければならないのではないか。

JVOAD（全国災害ボランティア支援団体ネットワーク）—ネットワークオブネットワーク。災害救援に関わるNPOは多く存在するが、ではどこでどういう団体がどんな活動をやっているかを俯瞰する情報はほとんどない。

東日本大震災ではJCNを設立しそこに取り組んだが、後からできた組織では難しかった。そこに報告する義務がないから、すべて自分たちで調査しなければならない。

被災地域で漏れや抜けがないように連携が必要。

避難所の対応は行政が行うと災害救助法で定められるが、益城町長からもボランティア・NPOへ依頼が電話・文書で幾度と頂いた。

行政だけではやりきれないのはあきらかで、この状況の深刻さをこの熊本地震で学んだ。

ボランティアセンターのあり方も問われている。

今回は9割以上ががれきの撤去やお掃除。

普段から集落に入り仕事としている社協職員がボランティアセンターの運営にすべて労力を取られ、現場に行きづらい。

避難所で寂しいお年寄りに声かけることもできない。

NPOは、烏合の衆となってはいけない。

熊本地震では地元NPOとJVOADが協力し「火の国会議」を毎晩19時から開催。

219団体が参加し各々の活動を共有した。

いまは地域別・テーマ別分科会に。

また行政（熊本県や熊本市・益城町）との連携会議を継続し、NPOができること、行政が本来することを取捨選択し、できる範囲の事を行う。

こうした仕組みづくりに努めた。

被災された方々の生の声にどう耳を傾けるか。

我々は何をしていくべきか。次の支援策へのいろいろなヒントがそこにある。

仕組みづくりも大切だが、原点を忘れてはいけない。

東日本大震災では、足湯では一万六千のつづやき。

我々は七ヶ浜を拠点に活動。五年の付き合いで地域では顔が見える関係が築かれ、スタッフは集落に生の声を聞くことができる。

宗教者と肩を張らずに、同じ支援者として連携することで信頼関係も生まれ、宗教者の理念とボランティアの概念が合致すると思う。

新倉典生氏「東京都仏教連合会の防災備災の取り組み」

東京都仏教連合会

都内各宗派2,600近く寺院が所属し、55箇所の地区からなる連合体。

結成以来、仏教による教化活動の興隆発展を目指し、社会問題や、被災地支援などにも積極的に活動している。

自然災害への対応について歴史は古く、両国の東京都慰霊堂に関東大震災を記録した絵画があり、当時の仏教僧が犠牲者に対し慰霊している場面が描かれている。

以来90年にわたり、仏教の慈悲に則った利他の心で、悲しみ、不安に寄り添う救援活動を実践。

近年の災害については義援金の募金活動を実施し、東日本大震災では2,000万円を支援。

阪神淡路大震災までは、義援金の対応がメイン。

東日本大震災では募金だけでなく、救援・復興支援ができないかと活動を検討。

東京都の「火葬支援」の犠牲者受け入れに対応。
東京都、仏教連合会の間で火葬供養に関してともに祈れるように交渉し、
約 900 名の宗教者が、火葬場で祈りを捧げた。
他にも東北各地において復興支援に関する活動を実施。

被災地寺院との接点。

被災仏教会（福島県、仙台、名取市、石巻市、塩釜、気仙沼寺院）との交流会や情報交換
から防災意識が高まり、平成 26 年の 9 月に首都圏で発生する大地震を想定して、都内約
2600 寺院への防災アンケートを実施。約半数が回答（被災者受入・備蓄についてなど）
アンケート調査に際しては、大阪大学の稲場さんのご協力を得た
本来寺院にアンケートをとること自体、レアケースであった。
防災についてや被災者の受け入れに関して、寺院での意識がとても低いことを感じた。

都内寺院の防災意識を深めるために継続してセミナーを実施。

都内寺院のうち、半分以上が建物に倒壊の危機にあることがわかっている。

減災の意識をたかめていく大切さ。

被災体験者の声を通し、避難所運営の意識の低さを改善。防災意識の標準化を目指す。

東京都帰宅困難者の事例。

東日本大震災のとき 500 万人の帰宅困難者が首都圏にいたとのこと。

一時避難所として都内の寺院のスペースを有効に使えるように働きかけを。

備蓄も帰宅困難者対策にしばってお寺で対応していけるように。

建物・施設の耐震性と境内の安全性の向上。現状把握・安否確認などの情報収集に関する
情報を発信。

地域連携、行政との連携に関して

東京都「火葬支援」の際にも感じたが、宗教者と行政との協働作業の困難さ、宗教アレル
ギーがかなり強い。

宗教施設は帰宅困難者受入ガイドラインにも掲載されていない。

今後、いろんな方面の方々と理解、信頼をつくりあげていければと考えている。

災害における我々寺院、僧侶の役割に関心が高まってきているため、

被災者への精神的ケア（宗教的な安心）、犠牲者への祈りも含め

今後も災害対策に合わせて防災備災に取り組んでまいります。

熊本地震の支援に関する報告

西川勢二氏（真如苑・SeRV）

宗教教団による「緊急救援の新しい展開」

東日本大震災での帰宅困難者の受け入れや行政との防災協定は行っていたが、この熊本地震で我々が今までにない活動として、

①避難者の受け入れ②ボランティアセンター開設への協力に取り組むことができた。

避難者の受け入れとしては、4月15日0:10近隣の4名。

以降増え続け、50名を超える方々が避難。

これは、他教団と比べて決して多い人数ではない。

比較的早い時期に鹿児島・宮崎などから陸路で生鮮野菜を提供するなどの連携も行った。

避難所ではご信者・ご信者でない方も入られた。自治は住民にお任せした。

経験がないぶん、仕切りなど少し手間取った面もあった。

その際に『寺院備災ガイドブック』（仏教NGOネットワーク）が非常に役に立った。

二番目のボランティアセンター開設。

これは宗教団体の災害支援の歴史では新しい展開と言えるかもしれない。

きっかけは真如苑本部が所在する立川市より支援に入っていた社協関係者を通しての打診。熊本市社協より正式な依頼を請けて、熊本支部駐車場の一部（100台分）を提供した。

SeRVでは、ボランティアセンター業務（電話・マッチング作業・資機材管理）

ボランティアへの炊き出しに取り組んだ。

また現地のニーズに応じて農業ボランティア等にも取り組んだ。

今後、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）としての宗教団体のもっている人的、物的資産を活用していこうという流れの端緒となるのか。

この度、宗援連で節目として出版された「災害支援ハンドブック」が全国の社協関係者に配布され、ソーシャルキャピタルとしての宗教の認識が深まれば、こういう流れが本物となっていくのであろう。

篠原祥哲氏（WCRP）

世界人道サミットー

5月23-24日トルコ共和国イスタンブール／第二次世界大戦後、最悪の状況／国連システムが機能していたかの反省／横に串刺すような人道支援／176カ国、9000人。

第1回目の国連での人道に関する会議。

宗援連、宮城県氏遊興法人連絡協議会、

WCRP で取り組んだ 2015 年 3 月第 3 回国連防災世界会議、パブリックフォーラムとして「防災と宗教」シンポジウム開催。

ジャミラ・マウモット前事務局長が寄られた際に、世界人道サミットの中で私達の提言をご発表して頂きたいと表明して下さいました。

今回の特徴として、本会議においては初めて宗教者のセッション設けられた。

世界の人道支援における宗教者への役割への期待が強く感じられた。

VOWS(Volunteer of WCRP & SYL) for kumamoto.

宗教者として災害ボランティアセンターを軌道に載せるお手伝いがしたかった。

ゴールデンウィークから夏休みまで人が減る期間にお手伝い／

週末金土日は一般ボランティア。

災害ボランティアセンターでは、被災者やボランティア希望者からの電話当番。

ボランティアセンターのボードニーズ、参加人数などの記入。

今見えてきているのは、ニーズの掘り起こしが必要。以前からしてニーズが減っている。違った形が求められている。

WCRP では、宗教者としての 3 つのプログラムの実施

①精神的サポート②地域コミュニティづくり③社会的弱者への特別な支援

熊本地震の活動現場では、支援者同士の対立も多くギスギスとした雰囲気だった。

「宗教者の方々は癒し系でいいですね」「電話をとるのも丁寧ですね」と現場の統括官からも言って頂いた。

安らかになって頂くふれあいも宗教者には大切であり、これも宗教者の支援であると実感した。

稲場圭信氏（宗援連世話人）

次のディスカッションへの導入として、現地の様子を写真をもとに時系列での説明。

宗教施設の避難所としての提供、避難所のトイレ清掃など宗教者の支援活動の紹介。

東日本大震災の経験をもとに、多くの宗教者が社協・NPO と連携している。

まだまだ余震は続くが、一方でボランティアの数も減っている。

7 回の熊本入りでそうした連携の現場を見てきた。

中長期での宗教者による活動が必要と感じた。

黒崎浩行氏（宗援連世話人）

熊本県の神社の被災状況(5月27日現在)に関して

法人数 1353 社、被災報告の法人 651 社、飛地被災含め 884 社。本殿の全壊 53 社。

神社界の動きとして、避難所の提供／境内駐車場での車中泊／支援物資の集約／湧水の提供／被災神社の復旧支援活動／神社義捐金募集／被災を免れた神社が拠点となり支援活動。

今後の課題として、地域の拠点となる神社に対する復興支援。

お祭りなど地域住民の復興に伴走。

また、地域防災の拠点としての期待と現実をどうギャップを埋めるかが挙げられる。

御手洗隆明氏（真宗大谷派）

前回は私の出身である大分での被害状況などを発表した。

やはり報道も少なく知名度も低い。

大谷派での活動の紹介。

東日本大震災の記録を本山研究所で、福島の方を招いて研究会を行う予定だった。

熊本地震のため実施できず、結局あの時の教訓が今回も活かされなかった。

宗教施設を避難所として提供する場合、施設の被災想定が不十分であるという指摘があった。被災者意識が欠けているのではないか。

被災者意識とは、自分の身の安全を確保しないと十分な支援ができないという結論に。

災害救助とは、まずは自分・家族の安全を確保してから行う事と指摘を頂いている。

大谷派での現在までの活動の報告。

本山の組織、九州域内の教務所から応援を頂き、寺院と門徒を対象とした支援活動を継続。

内容は支援物資の輸送・被災寺院の片付が中心。

また、有志による活動として、チーム熊本を結成。

NGO から助成も受け炊き出しも行っている。

組織として有志として、今回の熊本地震での大谷派の特色。

熊本教務所の本堂が仮修復でき、今後の支援拠点として役立てていく。

◆報告へのコメント

コメンテーター（島藺進氏）

「宗教者の実践とその協働」の「実践」の観点から登壇者の報告へのコメント

5年間の宗援連の活動を継続する中で、東日本大震災と熊本の震災に関わってきた。関東大震災での東京都慰霊堂まで遡ってみえてくることもある。阪神淡路大震災が大きな起点になっている。人道サミットでは難民の問題が大きいのでは。日本は、自然災害を通して学んだことを世界の知恵としていけるかどうか。宗教者の存在感は災害時に見えてくるが、平時はどうか。平時における宗教の社会での位置。行政が宗教者に期待をしつつあるという大きな変化（福祉国家に向けて）。地域包括ケアとは、行政が対応しきれない人の地域でのケアのありかた。宗教と社会の関係がかわってきて、宗教が関われる領域が大きくなってきている。臨床宗教師もその一環ではないか。

宗教者の行政、NGOとの協働、実践とは（司会：稲場圭信氏）

◆登壇者からのフィードバック

金田諦應氏：

震災前は自殺の対策を活動としてきた。社会がどこかおかしくなっている。そして東日本大震災となる。国も制度的にもたなくなっている。現場も悲鳴をあげている。地域のお寺や宗教者の連携に期待が寄せられている。帰宅困難者の発表があったが、死者という言葉をまず考えていくとき。日本人の死生観から、死者の問題は重要。棺桶はどこが受け入れるか。直下型地震の対応とは何か。

新倉典生氏：

お寺ですので、死者。犠牲者へと向き合う。震災前は、ハザードマップを作る際は、お寺の死体安置の量を聞かれたりした。東日本大震災以後、葬儀社や棺桶を扱う業者が連絡をしてきて、東北に棺桶を送る中継として手伝いを要請された経緯がある。葬送の支援を想定にいれてはいるが、日常の中で慈悲の実践が、行政や、地域にまだ理解されていない現状。そこから、慈悲と利他を理解してもらえる防災など境内を開放していくことを想定。お寺として反省がある。

西川勢二氏：

阪神淡路大震災を思い返すと、宗教に対する行政のイメージは明らかに変化がある。

心のケアということで仮設住宅での会話や傾聴訪問の大切さを伝えても、やめてほしいと。布教を心配された。

そのため、高齢者福祉の財団が傾聴ボランティア訪問をする活動を続けている。

東日本大震災の際には、SeRV が傾聴など仮設住宅訪問ボランティアに行くことに、行政は否定的ではなかった。

それは熊本の震災というより、今までの積み重ねとともに宗教者への期待は、あがってきている。

篠原祥哲氏：

WCRP の協働活動のなかで、行政（復興庁）の人と話していくと、悩みとは個人情報の問題や、宗教者との協働の難しさがあったとのこと。

特に葬儀の斡旋など。

昨今、行政の方が、門戸を開いてきて、距離が近づいてきている。

2013 年から行政の方が、会議にきてくださるようになってきたと感じている。

一つの宗教ではなく、超宗派、連合体であることも安全、安心となってきた。

環境問題も今後課題になってくるのでは。

（質疑応答）フロアーより

自営業の方：薬、医療関係と宗教者がどのように協働できるか。

島藺進氏：川崎市の医療団体のリーダーが宗援連と協働したいという話があった。

黒崎浩行氏：岡山の黒住教と AMDA の連携が行われていて、東日本大震災の際もボランティアに来ていた事例がある

金田諦應氏：宗教者と専門家が役割を果たすことで、精神的病の人も立ち直れたのではないか。幽霊を見た人への対応は、今の医療専門家では難しい。そこに宗教者が果たす役割は大きいのではないか。

東京 YMCA：社会福祉協議会との平時の関わり方を教えていただきたい。

西川勢二氏：寺院の数が多いわけではなく、所属の僧侶も限られている中で、日常的に社会福祉協議会と接しているのは本部クラスの寺院で、立川の本部では頻りに専門部署が接点を持っており、防災協定の申し出に対しても積極的に対応してきた。

稲場圭信氏：平時からの地域との信頼関係の大切さは、現場ではよく耳にする

（一言）

黒崎浩行氏：

死者と伝統と文化の結びつきがある中で、災害というときに宗教者は何ができるか。

智慧と文化的蓄積でどう対応していけるか。

社会の中でどのように受け入れられていくかが重要と感じる。
歴史の積み重ねで様々な問題にどう宗教者が関わってきたかを考えて、
行政とも協働していければと。

島藺進氏：

宗教者の支援活動の中でみえてくるもの。足りないこと。
トイレの清掃一つとってもそうかと。生きた知識が広がって共有されていく。
行政にとっても、宗教の役割に目を向けざるをえなくなってきた。
宗教側は社会に触れてきたことで見えることもあると。
真如苑や、立正佼成会の寺院開放もその一つであるかと。弱者のケアも考えていければ。

篠原祥哲氏：

宗援連のプラットフォームの役割の大きさを感じている。

西川勢二氏：

WCRP の発表の中で一教団でなく、連合体、連携の集まりの中の
情報交換の積み重ねの意義の大きさが感じられた。
それは支援していく側の慈悲の行いという、その他人に向けていく
感性こそが大事と改めて思う。

新倉典生氏：

悲しみからこうした連携が生まれてきた。
東京で万が一の有事に、他人のために救援に動ける準備をすすめていきたい。

金田諦應氏：

慈悲という言葉はすごく厳しい。慈悲をかける悲哀の中からこそ生まれるもの。
最後は心の問題。宗教者として腹を据えて関わっていかなければならない。
宗教と行政の関係は、呪いがかかっている。まさに政教分離。
それをといていくのは、臨床宗教師ではないか。
現場というのは、教義とかでは片付けられない場所。
そこにこそ、宗教者の役割、政教分離の呪いをとく道があるかと感じる。

◆ 閉会の挨拶（菘輪顕量氏）

皆様の御陰様で、五周年のシンポジウムを終了させて頂くことができました。
本日の話しでは、多くの宗教者が実際の現場で体験され、その智慧が語られました。

実際の現場では、その救済に関して、その土地の歴史や文化が大きく関わってくるという発言もございました。日本も北から南まで多くの分化が存在。
その地域に合わせたものでなければなりません。

日常のレベルで協働を実際に行っていなければ、いざという時に協働できるものではなく、普段からのお付き合いがいかに大切かも分かりました。

実際の社会では、宗教者も行政の方々も自分の分野だけでなく、
様々な分野で関わっています。

現在の医療で推奨するチーム医療のように、行政・宗教・医療者がチームとなって
災害支援に取り組まなくてはならない。

日常から協働できる体制をつくることができるかが今後の我々の課題です。

宗教者が最終的にケアできるのは、心の問題なのではないかのご意見もありました。
最後までお付き合いを頂きありがとうございました。